

## 芸術文化と創造的資質向上に関する実証的研究

### 2020 年度研究成果報告書

#### 概要

「創造的資質」、すなわち自ら新しいものを生み出していくことに自信を持ち、そのような活動に好んでアプローチできる態度や能力は、近年ますます重要なものになっている。特に、日本の中高生は先進諸国に比べて創造性への自己効力感やアイデンティティが低いことが報告されており(Adobe, 2017)、創造的資質を育てていくことは、我が国において喫緊の課題となっている。

そのような創造的資質の育成に寄与すると国際的に期待されているものとして、「芸術体験」が挙げられる。例えば Karwowski & Kaufman (2019)は、創造的資質の中でも、創造性への自己効力感(creative self-efficacy)に着目した調査研究を展開し、それらが芸術教育によって高まる可能性を示唆している。しかしながら、実際にどのような時期に、どのような場所で、どのように芸術文化と関わることで、創造的資質を高めるかといったことは、未だ実証的に明らかにされていない。

本研究グループは、2020 年度の研究でまず創造的資質に関わる予備調査や文献調査をした。その上で、研究 1 として創造性への自己効力感に焦点を当て、それを測定する心理尺度の翻訳・開発を行った。また、研究 2 として、20 代から 30 代の成人を対象にした質問紙調査によって、児童期から成人期までの芸術文化活動との関わりが創造的資質に与える影響を検討した。これらの研究によって、児童・青年期の学校教育、美術館、家庭等、それぞれにおける芸術文化との関わりが、成人期における芸術に対する態度や、創造的資質にどのような影響をもたらしているかが特定できる可能性がある。

これらの研究は、現在国内外の学術誌への投稿に向けて、調査結果の分析・論文執筆の途上にある。本報告書では、研究 1・2 の大まかな調査結果を報告する。

研究 1：創造的自己尺度と創造的マインドセット尺度日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討

## 調査 1

### 目的

創造的自己尺度、および、創造的マインドセット尺度日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討を目的として、一般成人を対象にした質問紙調査を実施した。

### 方法

**日本語版創造的自己尺度、および、創造的マインドセット尺度の作成** 創造的自己の原尺度は Karwowski et al.(2013), 創造的マインドセットの原尺度は Karwowski (2014)が作成した。創造的自己は創造的自己 6 項目と創造的アイデンティティ 5 項目からなり、創造的マインドセットは成長マインドセット 5 項目と調整マインドセット 5 項目からなる。いずれの尺度も十分な信頼性・妥当性が報告されている (Karwowski et al., 2013; Karwowski, 2014; Karwowski et al, 2018)。日本語版の尺度作成にあたって、原著者の Karwowski の許可を得た。翻訳を職業とする専門家 2 名 (英語を母国語とする翻訳家 2 名) に依頼し、原尺度 2 つの項目を日本語に翻訳するように依頼した。日本語訳の結果を踏まえて、心理学を専門とする大学教員 3 名 (このうち 1 名は海外居住経験あり)、および大学院生 1 名が表現を協議して修正した。次に、前述の翻訳家とは別の翻訳家 2 名 (英語を母語とする翻訳者) にバックトランスレーションを依頼した。さらに、その翻訳者に原版と項目内容が等しいかどうかを検討するように依頼したところ、原版と日本語訳の意味はほぼ等しいという結論を得た。いくつか日本語の表現で検討すべき箇所を提案されたため、先ほどの 4 名で原版と等しくなるように表現を修正して、創造的自己尺度、および、創造的マインドセット尺度日本語版を作成した。

本研究では、創造的自己と創造的マインドセット項目を呈示する前に、それぞれ「以下に人々の態度や考えを説明する文章を示します。これらの文章があなた自身にどのくらいあてはまるかを判断して、最も近いと思う数値を選択してください。回答に正解や不正解はありません。あなたの率直な気持ち・考えを回答してください」、 「以下に創造性に対する態度や意見を説明する文章を示します。これらの文章があなたの意見をどの程度説明しているかを判断して、最も近いと思う数値を選択してください。回答に正解や不正解はありません。あなたの率直な気持ち・考えを回答してください」と教示した。創造的自己尺度・創造的マインドセット尺度のいずれも「1: 全くそう思わない」から「5: 強くそう思う」の 5 件法で回答を求めていたが、Karwowski & Kaufman (2019)によると、回答は 5 件法以上で出来るだけ詳細な情報を得る必要があることが示されていたため、本研究では「1: 全くそう思わない」から「7: 強くそう思う」の 7 件法を採用した。

**調査協力者** 調査会社に委託して、2021 年 3 月にオンラインで質問紙調査を実施した。調

査には 20 代から 60 代の一般成人（男性 350 名，女性 350 名，平均年齢 44.57 歳（ $n = 700$ ;  $SD = 13.718$ , レンジ: 20—69)) が調査に参加した。回答者は芸術文化活動についてあなたの経験や考えについて調べることを目的とした調査であるという説明を受け、約 20 分で質問紙に回答した。

なお、回答前には本調査への回答は任意であること、本調査の目的や個人情報の保護などについての説明を記載し、それらに同意した場合のみ回答するように教示した。本研究は東京大学倫理審査委員会によって承認を受けていた。

**質問紙の構成** 質問紙は、創造的自己尺度と創造的マインドセット尺度日本語版の他に、学歴・親の学歴・回答者の世帯年収、現在の芸術活動に関する項目、性格・楽観悲観・レジリエンス・動機付け・自尊感情・自己同一性・創造的達成・主観的幸福感など 8 つの心理尺度が含まれていた。

## 結果と考察

### 因子構造の検討

因子分析を用いて創造的自己尺度および創造的マインドセット尺度の因子構造を分析した結果、概ね原尺度と同様に因子構成が確認された。また、各因子の内的整合性も十分であった。

### 基準関連妥当性

創造的自己尺度、および、創造的マインドセットの基準関連妥当性を検討するために、創造的自己尺度の下位概念として創造性への自己効力感（以下 CSE）、創造的アイデンティティ（以下 CPI）、また、創造的マインドセット尺度の下位概念として成長マインドセット（以下 Growth）と固定マインドセット（以下 Fixed）の因子得点をそれぞれ算出し、理論的に関連すると言われる概念を示す尺度と相関分析を行った。その結果、概ね先行研究に一貫した結果が得られた。

## 調査 2

### 目的

調査 2 では、創造的自己尺度の再検査信頼性を検討した。約 5 週間後に調査 1 に参加した回答者に再度質問紙調査を行い、2 時点間の級内相関係数を算出し、再検査信頼性を検討した。

### 方法

**調査協力者** 調査 1 に参加した 700 名に調査 1 を実施した約 5 週間後に再度調査を依頼したところ、200 名（男性 100 名，女性 100 名，平均年齢 44.79 歳（ $SD = 14.02$ ）から回答を得た。

質問紙の構成 1 時点、2 時点とも、調査 1 で作成した創造的自己尺度を利用した。

#### 結果と考察

再検査信頼性を検討するため、創造的自己尺度の下位概念 CSE・CPI それぞれの平均点を算出した。そして、2 時点間の級内相関係数(Interclass Correlation Coefficient)を算出した。その結果、CSE と CPI に関して十分な結果が得られた。

#### 研究 1 の総合考察

研究 1 では創造的自己尺度、および、創造的マインドセット尺度日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討を目的として、一般成人を対象にした 2 つの質問紙調査を実施した。その結果、日本語版創造的自己尺度、および、創造的マインドセット尺度に十分な信頼性・妥当性が確認された。

#### 研究 2 将来の芸術文化との関わりに影響する要因の検討

##### 目的

研究 2 の目的は、特に美術と音楽に焦点を当て、児童期・青年期における様々な芸術活動の体験が、それぞれどの程度、成人した際の芸術に関わる習慣の形成や芸術的資質に影響しているのかを明らかにすることである。

美術と音楽は、数多ある芸術領域の中でも、特に児童・生徒が、フォーマル、インフォーマルな場面の双方で触れる機会の多いものだと言える。フォーマルな場面では、図画工作・美術あるいは、音楽の授業があり、原則的には我が国のすべての児童・生徒が、そこで表現・鑑賞の両面で美術や音楽の活動を学んでいる。さらに近年では、美術館・博物館と学校とが連携したプログラムも活発に行われており、その経験の有無は、授業とは異なるインパクトを児童・生徒にもたらしている可能性がある (Crowley, et al., 2014; DeWitt & Storksdieck, 2008)。

インフォーマルな環境下における芸術体験の影響に関しては、古くより社会学者の Bourdieu (1979) などが家庭の要因の強さを指摘してきた。すなわち、家庭内の文化的環境や家族の芸術に関わる習慣が、子供の文化的な関わり形成に影響を与えているという主張である。

さらに、この 20 年程度で、美術館や劇場で開催されるワークショップの数は大きく増加している。その中では、アーティストや表現のプロフェッショナルと関わりながら、hands-on で表現や創造を体験できることも多く、鑑賞とは異なる形で、芸術文化や表現活動に関わる習慣を形成するきっかけとなっている可能性がある。

上記を踏まえ、本研究では、学校の授業の記憶、家庭の環境、美術館・コンサートへの来訪経験、ワークショップへの参加経験など、過去の芸術活動との関わりが、それぞれ大人になった際の芸術文化に対する態度にどのように影響しているかを明らかにすることを目的に、質問紙調査を行った。また、研究 1 で尺度を作成した創造的アイデンティティ、及び、創造的マインドセットについても合わせて尋ね、芸術文化に関わる習慣と創造的資質との関連についても検討を行った。

## 方法

### 調査協力者

調査会社を用いて、質問紙調査を実施した。調査対象は、都内在住の 20 代から 30 代の 1000 人、及び、石川県在住の 20 代から 30 代の 800 人である。調査はいずれも 2021 年 3 月に実施した。

20-30 代を対象にした理由としては、芸術に関わるワークショップや、美術館と学校が連携したスクールプログラムなどが、この 20-30 年で大きく広がったことが挙げられる。逆に言えば、40 代以上の場合は、児童期にワークショップや美術館プログラムを体験した人数が限定されることが予想されたため、研究の対象からは省いた。

また、調査対象を都内及び石川県在住者に設定した理由としては、都内は美術館やコンサートホールなどが多く、地理的には誰もが訪れやすい状況にある一方、出身地は様々であることが予想されたためである。そのため、現在の居住地の要因をある程度統制した上で、児童期・青年期の文化的環境の違いの影響も検証しやすいことが予想された。

他方で石川県は、金沢 21 世紀美術館が開館まもなくより、全小学生を対象にスクールプログラムを実施しているため、美術館来訪の効果を検証しやすいことが推測された。また、都市部と地方部を比較することも視野に入れて、両地域にて調査を行った。

### 質問紙の構成

質問紙には大きく分けて下記 4 つのカテゴリの項目を含めた。

1 つ目は、現在の芸術文化との関わり方を訪ねる項目群である。美術館やコンサートへの来訪やワークショップ参加の頻度を尋ねる 4 項目 (5 件法)、好んでいる美術・音楽ジャンルを尋ねる 14 項目 (5 件法)、美術や音楽に関わる習慣を尋ねる 19 項目 (4 件法)、芸術文化に関するイメージや価値認識を尋ねる 13 項目 (5 件法) などによって構成される。

2 つ目は、過去の美術・音楽との関わり方を尋ねる項目群である。小学生から高校生時代の美術館やコンサートへの来訪やワークショップ参加の回数を尋ねる 11 項目 (5 件法)、小学生から高校生時代の美術や音楽に関わるイメージや習慣、家庭環境などを尋ねる 27 項目 (5 件法)、習い事や部活動の経験の有無や年数を尋ねる 10 項目、などである。

3 つ目は、創造的資質を尋ねる項目群である。研究 1 で作成した、創造的アイデンティティ尺度 11 項目 (7 件法)、及び、創造的マインドセット尺度 10 項目 (7 件法) を用いた。

4つ目に、その他統制変数として、年齢や性別の他、現在および小・中学生時代に住んだ居住地や、そこから最寄りの国立・公立美術館までの所要時間、自身及び両親の最終学歴を尋ねる項目などを含めた。

## 結果と考察

現在は、東京在住の調査協力者の回答の分析を進めている段階である。

まず相関分析の結果、美術・音楽に共通して、小・中学校の授業のポジティブな記憶、学校行事としての美術館・コンサート来訪の経験、家族との美術館・コンサート来訪の経験、家庭の文化的環境、ワークショップ参加経験などは、いずれも将来の美術館・コンサート来訪頻度や、美術・音楽との日常的関わりとの間で、正の相関があった。さらに、重回帰分析を行ったところ、それらの要因のうちいずれか一つが突出して強く影響しているわけではなく、それぞれが強くないが固有の影響力を持っている可能性が示唆された。ただし、学校の授業のポジティブな記憶から、美術館・コンサートへの来訪頻度へのパスは有意ではなかった。

これらの結果から、将来的な文化芸術との関わりを促すには、小・中学生の時代に、フォーマル・インフォーマルを含めて多様なかたちで関わりを持つような機会を設けることが有益であることが推測される。ただし、学校の授業は、将来の美術館やコンサートへの来訪を促すことにはあまり効果を持っていない現状があると言える。

また、現在の芸術との関わりは、いずれも創造的アイデンティティ、及び、創造的マインドセットと正の相関があった。相関データであるため本結果のみから因果の方向性は特定できないが、創造的資質を高める上で、芸術活動と関わることで一定の効果を持っている可能性が示唆された。